

先月は、本校の卒業生である2名の教育実習生が、学校に爽やかな風を吹き込んでくれた。音楽の教育実習生が学習指導案を作成し、研究授業を行った。事前に学習指導案を持ってきてくれた。それを見ると、どんな授業で何をやりたいのかが分かった。それだけでも、なかなかりっぱなことである。

授業が始まった。表情が明るい。大事なことである。特に、音楽の先生には、そうあってほしい。授業は、指導案に書いてある流れで進んでいった。そうできるのも、なかなか大したものである。生徒も反応がよく、先生の発問や指示で、考え、発表し、歌った。

教育実習生が授業をすると、たいていの場合は、生徒が協力的になる。あれは、生徒の優しさなのだろうか。一つの思いやりなのだろうか。実習生も、生徒が自分のことを助けるように頑張ってくれたことを感じていた。それが大切である。

この日は、45分の短縮授業だった。最後の振り返りで時間が足りなくなったが、本来の50分授業であれば、ちょうど収まる計算である。これもなかなかできないことである。あれもこれもとやりたくなったり、詰め込みすぎたりして、時間が足りなくなることが多い。この授業では、指導案の段階から、やることが絞られていた。

放課後に、実習生が校長室に来てくれた。近い将来、教壇に立つことを想定して、気がついたこと、考えてほしいこと、肝に銘じてほしいことを話した。そこには、すぐにでも直せることと、年数を重ねないとできないことがあった。

実習生には、実習初日に、NGワードの一つ指示した。それは、「なので」である。「～ました。なので、～」の「なので」である。これが、世の中に氾濫している。テレビでも、民放のバラエティ番組は言うに及ばず、コメンテーターのような存在でも平気で使っている。さすがにNHKのアナウンサーは使わない。なぜなら、正しくないからである。残念ながら、教員でも使う人が増えてきている。憂慮すべきことである。学校の授業は、正しい言葉を使い、それを教えるのは当たり前のことである。

実習生は、授業中に、一度も「なので」を使わなかった。きっと、普段は使っているはずである。意識して使わないようにしたのである。それでも、「じゃあ」は何度か使っていた。それを指摘したところ、無意識に言っていたとのことだった。そこで、授業は、意識的に、意図的に、計画的に行うものであることを伝えた。授業は毎回、何かを意識しながら行うべきである。

他にも、将来、教員になったことを想定して話をした。すると実習生が涙を浮かべた。話を聞くと、1回目の研究授業では、自分の発問がまずく、生徒が困ってしまったこと、思い通りに進めることができなかったことを話してくれた。そのことを思い出し、悔しくて涙が出てきたそうである。

ということは、1回目の授業の反省をもとに、2回目の研究授業である今回の授業を行ったということになる。短期間で、ここまで改善するとは、これもまたなかなかである。一番は、授業をやって悔しいと思えたことである。悔しさはパワーとなる。ガッツがある若者である。

涙ぐんでいる実習生に、こんなことを伝えた。「あなたは、必ず教員にならないとだめだよ。あなたのような人に教員になってほしいんだよ。絶対に採用試験に受かりなさいよ」それから、「そのまま校長室を出ると、いかにも校長先生に泣かされた実習生となるから、お願いしますよ」

今、思い返しても、いい教育実習だった。福島県の教員採用試験まで、あと2週間である。本校の卒業生の健闘を祈るばかりである。